

『大日経』の資料と研究史概観

山本 匠 一 郎

はじめに

『大日経』の研究は、近代のインド学・チベット学の発展により、大きな変容を遂げた。わが国の真言密教において重要視される『大日経』は、サンスクリット原典がなく、漢訳以外ではチベット訳しか存在しないために、文献学上の比較資料として、チベット訳『大日経』は大きな脚光を浴びた。一般に現代の『大日経』研究者は、漢訳とチベット訳という比較資料を用いて、文献・思想・図像学的な研究に意を傾けている。こうした現代の『大日経』研究は、平安期から明治期にいたるまでの先学たちにとって想像することもできない領域に踏み込んでいるといえる。

中世インドにおける『大日経』の成立から、現代にいたるまでの『大日経』研究の歴史は、かなり膨大なものとなるから、そのすべてをここで網羅的に詳論することはできないけれども、近世以前の研究法から大幅に転換した近現代の研究状況を整理し、その成果と問題点を示しておくことは、ますます情報量が増えていく現代において、必要な作業であろう。先行研究を把握することは、作業前提であり基礎であるから、研究史を提示することは、一見、客観的な資料紹介であるかのように思える。だが、こうした作業には、当該分野に特有な偏向が伴いがちであって、またその偏向によって研究領域全体の見通しを悪くさせている。近代において変容した学問環境を述べるにあたり、できるだけ偏った視法を避けるべきであるが、そもそもの研究基盤が文献研究に偏向しているとい

『大日経』の資料と研究史概観

う事実は認めざるを得ない。

近代ヨーロッパの文献学によって、インド学・仏教学の研究の礎が築かれ、『大日経』の研究は西洋の学問的方法を導入して、従来の研究方法を大きく転換してきた。斯学の発展に沿った、近現代における『大日経』の研究状況を素描するだけでも、その質・量は相当なものとなる。本論では、『大日経』の資料論を提示し、さらに現代の研究状況から鑑みたくえでの『大日経』の成立、経典の区分、研究法の枠組について言及し、近年にいたるまでの研究動向を示すことにしたい。

蔵漢『大日経』の資料論

『大日経』研究においては、一次資料の欠如をいかに補うかという問題がある。文献資料のオーソドックスな取り扱い方として、一次資料→注釈→儀軌→末積→研究論文といったぐあいに、順に取り組むべき研究資料の層があるが、『大日経』には一次資料のサンスクリット文献が発見されていないので、漢訳とチベット訳が基礎資料となる。『大日経』梵本の発見は、斯学の徒にとっては夢のようなことであり、かつて河口慧海が、『大日経』の梵本を求めてインド・ネパール・チベットへ求法の旅を行なったがその目的はついに果たせなかった。『大日経』研究は、漢訳とチベット訳という二次資料に基づかざるを得ない制約があるけれども、『大日経』の梵文による比較研究の方法として、梵文原典の存在する諸経典・論書・注釈書の類から、『大日経』本文からの引用、或いは同一表現を探索・回収するという研究方法がある。『大日経』全体では、約20ヵ所にのぼる梵文断篇の存在が確認され、その詳細は桜井宗信 [1989] によって、新たに発見された「住心品」部分の断簡とともにまとめられている。『大日経』の梵語研究の資料論はこの書に尽きているが、種村隆元氏の御教示によれば、「住心品」の「如実知自心」の文が他のサンスクリット語文献に引用されるという^①。サンスクリットのデジタルアーカイブ化がかなり進行しているので、これからも『大日経』の梵文断簡が他の文献から回収されることが期待される。

ここでは漢訳『大日経』とチベット訳『大日経』とは、どこが相違しているか、またその文献学上の問題点について触れておきたい。

漢訳『大日経』の資料

Ch. : 大正 No. 848. 大毘盧遮那成佛神変加持经 (7 卷)

訳者 : 善无畏・一行共訳

国訳 : (1) 神林隆浄 [1931] 『国訳一切经』 インド撰述部・密教部 1、大東出版社

(2) 勝又俊教 [1983] 『两部大经』 上、真言宗豊山派宗務所

(3) 宮坂宥勝 [1986] 『仏教经典选 8 密教经典』 筑摩书房——『大日经』 「住心品」 訳注、『大日经疏』 「住心品」 抄訳と解説。

(4) 頼富本宏 [1988] 『大乘仏典 8 〈中国・日本篇〉 中国密教』 中央公論社——『大日经』 「住心品」 「入秘密曼荼羅位品」 の和訳と解説。

(5) 宮坂宥勝 [1992] 『和訳大日经』 東京美術——「住心品」 の現代語訳。

(6) 福田亮成 [1998] 『新国訳大藏经』 密教部 1、大蔵出版

英訳 : (1) Minoru Kiyota [1981] *THE MAHĀVAIROCANA-SŪTRA (First Chapter)*, An Annotated English Translation, 『勝又俊教博士古稀記念論集 大乘仏教から密教へ』 春秋社

(2) Chikyo Yamamoto [1990] *MAHĀVAIROCANA-SŪTRA*, International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashal, New Delhi——『大日经』 の全英訳。

(3) Alex Wayman, Ryujun Tajima [1992] *THE ENLIGHTENMENT OF VAIROCANA*, Buddhist Tradition Series, Vol.18, Motilal Banarsidass Publishers, Delhi——Waymann 氏によるチベット訳を中心とした「具縁品」の研究・解説、および田島氏による漢訳文献を中心とした「住心品」の研究・解説という二部構成。

- (4) Rolf W. Giebel [2005] *The Vairocanābhisambodhi Sūtra*. BDK English Tripiṭaka 30-I, Berkeley——『大日経』の全英訳。

チベット訳『大日経』の資料

チベット訳の資料は以下のとおりである。

Tib. : Toh494/Ota126.

rNam par snang mdzad chen po mngon par rdzogs par byang chub pa rnam par sprul pa byin gyis rlob pa shin tu rgyas pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po zhes bya ba'i chos kyī rnam grangs.

Skt. : Mahāvairocanābhisambodhivikurvītādhiṣṭhānavaipulya-sūtrendrarāja-nāma-dharmaparyāya.

(大毘盧遮那成仏神變加持方広経のインドラ王という法門)

訳者 : Śīlendrabodhi · dPal-brtsegs 共訳

チベット訳の校訂と和訳と英訳について記しておく。

校訂 : (1) 服部融泰 [1931] 『藏文大日経』 西藏經典出版所——sNar-thang 版を底本とする sDe-dge・北京・rGyal-rtse 写本の校合。

- (2) 越智淳仁 [1992] 「新校訂チベット文『大日経』」『高野山大学論叢』27 ; 越智淳仁 [1997] 「新校訂チベット文『大日経』(続) —第2章「入漫荼羅具縁真言品」—」『高野山大学論叢』32 ; 越智淳仁 [1998] 「『大日経』「受方便学処品」の研究」『山崎泰廣教授古稀記念論文集密教と諸文化の交流』——第1章「住心品」と第2章「具縁品」と第17章「受方便学処品」の校訂。sDe-dge 版を底本とし北京, sNar-thang, Co-ne, lHa-sa, sTog Palace, rGyal-rtse 写本の計7本のテキスト校合であり、さらに漢訳『大日経』と Buddhaguhya の『大日経広釈』(*Bhāṣya/Vṛtti*) の引用経文をも必要に応じて参

照して校合し、現在までに知られている梵文断篇を付す。

- (3) 宮坂宥勝 [1995] 『インド古典研究Ⅶ』(ACTA INDOLOGICA VII)、成田山新勝寺——第1章「住心品」の校訂。チベット訳『大日経』『大日経略釈』『大日経広釈』(*Bhāṣya/Vṛtti*)の校訂(漢訳『大日経』対照)。sDe-dge版を底本とした北京, sNar-thang, Co-ne, lHa-sa, Li-thang版の計6本の校合(注釈はsDe-dge版を底本とした北京, sNar-thang, Co-ne版の4本)。
- (4) Shigeaki Watanabe [2008] *The Mahāvairocanābhisambodhi-vikurvitādhiṣṭhānavaipulyasūtrēndrarāja-nāma-dharmaparyāyaḥ Chapter 29 with Buddhaguhya's Bhāṣyam and Vṛtīḥ*—TIBETAN TEXT—、『成田山仏教研究所紀要』31

- 和訳：(1) 梅尾祥雲 [1916] 「蔵漢対照和訳大日経」『密宗学報』32-35。「住心品」。他はNo. 36-61。
- (2) 田島隆純 [1927] 『蔵漢対訳大日経住心品付大日経蔵漢両訳比較研究概観』新興社——また田島氏のパリ・ソルボンヌ大学における学位論文に次のものがある。*Étude sur le MAHĀVAIROCANASŪTRA (Dainichi-kyo) avec la traduction Commentée du premier chapitre*, Paris, Adrien Maisonneuve, 1936.
- (3) 河口慧海 [1934] 『蔵文和訳大日経』西藏經典出版社
- (4) 岩鶴密雲 [1935] 「西藏伝大日経住心品和訳」『新更』2
- (5) 岩鶴密雲 [1938] 「西藏文大日経具縁品和訳」『新更』5
- (6) 那須実秋 [1954] 「漢蔵対照蔵文大日経の和訳」『智山学報』1
- (7) 酒井紫朗 [1968] 「大日経息障品の理解」『密教学会報』7
- (8) 酒井紫朗 [1971] 「大日経外篇の「念誦の法則品」について」『密教学会報』9, 10 合併号

- (9) 月輪賢隆 [1971] 「西藏訳大日経並に註釈—漢訳第二七世出世護摩法品より第三一囑累品まで対照—」『仏典の批判的研究』百華苑
- (10) 酒井紫朗 [1972] 「大日経外篇の「観修の文字建立と灌頂の章」について」『密教学会報』11
- (11) 岩本裕 [1975] 『仏教聖典選 7 大日経』読売新聞社
- (12) 渡邊重朗 [2010] 「西藏訳大日経並びに覚密造大日経広釈 (MVV) 第 29 品—和訳と訳注—」『成田山仏教研究所紀要』33
- (13) 遠藤祐純 [2010, 2011] 『藏漢対照『大日経』と『広釈』上・下』ノンブル社——河口慧海以来の全訳である。頁上段に漢訳の国訳（書き下し文）と頁下段にチベット訳の和訳を対照させ、章毎に『大日経広釈』（*Vṛtti*）の和訳を載せる。

英訳：Stephen Hodge [2003] *The Mahā-vairocana-abhisambodhi Tantra with Buddhaguhya's Commentary*, Routledge Curzon——『大日経』の全英訳と各小節毎に対応する Buddhaguhya の『大日経広釈』（*Vṛtti*）を付す。また付属儀軌（*The Mahā-vairocana-uttara-tantra*）と『大日経略釈』（*The Pinḍārtha*）を載せる。

漢訳『大日経』は全7巻36章である。このうち6巻31章が『大日経』の中核部分であり、最後の第7巻5章は『大日経』に付属する供養儀軌である。この第7巻の梵文原典は善無畏自身が北インドで入手したものであると考えられており、『大日経』とは別個に存在する付属儀軌である。

チベット訳『大日経』も全部で36章よりなり、章数のうえでは漢訳と同じであるが、チベット訳では最後の7章は護摩法などの手引きを書いた付属儀軌（uttaratantra. 続タントラ）であり、本経（mūlatantra. 根本タントラ）には含まれない。根本タントラの部分を比較したときに、漢訳『大日経』6巻31章に対し、チベット訳『大日経』は全部で7巻29章より構成され、漢訳より2章少ない。漢訳もチベット訳も最後の部分

は供養儀軌であるが、両者は相違し、このチベット訳の供養儀軌に対応する漢訳は存在しない。漢訳の第7巻に相当する部分は、チベット訳経典では『大日経』とは別個の儀軌になっており、漢訳のように『大日経』に所属した儀軌ではない。チベット大蔵経は「經典部」(bka' 'gyur)と「論疏部」(bstan 'gyur)の二部に分けて編集されているが、この漢訳『大日経』第七巻に相当するチベット訳の供養儀軌は論疏部に収録されている。『大日経』を、供養儀軌を伴った全体として捉えるならば、蔵漢『大日経』の最大の相違点は、その供養儀軌に存在する。以下にその詳細を記す。

漢訳における『大日経』儀軌

『大日経』の供養儀軌の同本異訳は唐土で種々制作されている。漢訳『大日経』第7巻の類本と同本異訳として次の二本がある⁽²⁾。

Ch. : (1) 大正 No. 849. 大毘盧遮那仏説要略念誦經 (1 卷)

訳者：菩提金剛

国訳：(1) 勝又俊教 [1983] 『兩部大經』上、真言宗豊山派宗務所

(2) 木村秀明 [1996] 『新国訳大蔵経』密教部7, 大蔵出版

Ch. : (2) 大正 No. 860. 大日経持誦次第儀軌 (1 卷) 失訳

また『大日経』第7巻の注釈書として、新羅の僧不可思議が善無畏の講述を記録したものがあ

Ch. : 大正 No. 1797. 大毘盧遮那経供養次第法疏 (2 卷)

訳者：不可思議撰 (略称「不思議疏」)

国訳：那須政隆 [1939] 『国訳一切経』経疏部15, 大東出版社

この他に、「胎蔵四部儀軌」といわれる『大日経』の供養儀軌が存在する⁽³⁾。

Ch. : (1) 大正 No. 850. 撰大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼羅广大念誦儀軌供養方便会 (3 卷)

訳者：善無畏 (略称「撰大儀軌」)

Ch. : (2) 大正 No. 851. 大毘盧遮那経广大儀軌 (3 卷)

『大日経』の資料と研究史概観

訳者：善無畏（略称「廣大儀軌」）

Ch. : (3) 大正 No. 852. 大毘盧遮那成仏神變加持経蓮華胎藏悲生曼荼羅
広大成就儀軌供養方便会（2巻）

訳者：法全集（略称「玄法軌」）

Ch. : (4) 大正 No. 853. 大毘盧遮那成仏神變加持経蓮華胎藏菩提幢標幟
普通真言藏広大成就瑜伽（3巻）

訳者：法全集（略称「青龍軌」）

国訳：神林隆浄 [1931] 『国訳一切経』 密教部 3, 大東出版社

チベットにおける『大日経』儀軌

漢訳の第7巻に相当する、チベット訳『大日経』儀軌の出典と正式な名称は以下である。

Tib. : Toh2664/Ota3488.

rNam par snang mdzad chen po mngon par byang chub par
gtogs pa'i rgyud kyi mchod pa'i cho ga.

Skt. : Mahāvairocanaḥisambodhisambuddha-tantra-pūjāvidhi. (大毘
盧遮那成仏所属タントラ供養儀軌)

著者：dPal-bzang-rabs-dga'.⁽⁴⁾

訳者：Padmākaravarṃa, Rin-chen-bzang-po 共訳

和訳：酒井真典 [1936, 1938] 「漢訳対照西藏文大日経供養法和訳」『新
更特別号』 3, 5 ; 「大日経外篇の念誦の法則品について」『密教学
会報』 9, 10

和訳：遠藤祐純 [2011]

著訳者が異なるということは、この供養儀軌が『大日経』本経とは別
に成立したものであるということは明らかである。

チベットにおけるこの他の『大日経』関係の成就法儀軌に次のものがある。

Tib. : Toh2665/Ota3489.

rNnam par snang mdzad kyi sgrub pa'i thabs kyi cho ga.

Skt. : Vairocana-sādhanopāyikā. (毘盧遮那成就法儀軌)

著者 : Rgyal ba'i 'od (Jayaprabha)

和訳 : 松長有慶 [1953] 「西藏文毘盧遮那成就法儀軌和訳」『密教文化』
24, 25

このように蔵漢両訳の文献に種々の胎蔵系供養儀軌が存在するという
ことは、インドにおいて『大日経』に基づく儀軌類が時代を経て改変・
増広されていったということを示唆する。『大日経』をタントラとして捉
えたとき、供養儀軌は重要な意味を持つが、蔵漢供養儀軌の比較にまで
及んだ研究は少なく、今後の課題である。

チベット訳と漢訳における相違点と問題点

供養儀軌を伴わない『大日経』の中核部分 (mūlatantra) に関して、
チベット訳と漢訳を比較対照してみると、章の配列、順序に若干の相違
が見られる。漢訳の『大日経』は供養儀軌を除いた中核部分は31章ある
が、チベット訳は29章となる。章数が違う理由は、二つの章がチベット
訳においては併合されているからで、内容はほぼ一致している。配列上
の相違点は以下の四点である。

- ①漢訳「第5、第6」の2章が、チベット訳では第5章の中に併合され
る。
- ②漢訳「第13」と「第14」がチベット訳では順序が転倒している。
- ③漢訳「第27、31」の2章が、チベット訳では第29章の中に併合さ
れる。
- ④漢訳「第28、29、30」の3章が、チベット訳では第6章の後に挿入
されている。

これらの蔵漢両訳のテキスト上の相違は、単なる翻訳上の差異ではな
く、『大日経』のサンスクリット原典がそもそも漢訳とチベット訳とでは
違っていたことが推察されている。確固としたテキスト資料をそなえて
いるかに見える『大日経』には、時代的に微妙な遷移があり、それぞれの
テキスト成立年代ごとに、わずかながらも位相が存在している。それ

『大日経』の資料と研究史概観

を年代順に並べると以下ようになる。

7世紀半頃；『大日経』原典成立

724年；漢訳『大日経』（善無畏・一行共訳）成立……………Ⅰ

727年以後；『大日経疏』（善無畏講述・一行筆記）成立、『大日経義釈』（智儼・温古再治）成立

8世紀後半（約760年）；『大日経広釈』（Buddhaguhya作、未再治本 *Bhāṣya*）成立……………Ⅱ

9世紀初；チベット訳『大日経』（Śīlendrabodhi・dPal-brtsegs共訳）成立……………Ⅲ

1461年；『大日経広釈』（gZhon-nu-dpal校訂、再治本 *Vṛtti*）成立

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの各テキストは、それぞれ梵文原典が異なっていたと推測されている。とくにⅡのBuddhaguhyaが用いた梵文原典は、善無畏・一行が使用したテキストⅠに近いとされる。漢訳とチベット訳との最大の相違点は、上記④の漢訳「第28、29、30」の3章が、チベット訳で第6章の後に挿入されているという点であるが、Buddhaguhyaが用いたテキストにはその相違が見られない^⑤（上記①②③の相違は見られる）。また経文の意味上の差異もそれぞれに認められる。

翻訳年代は、漢訳の方がチベット訳より100年ほど早く、この間に『大日経』原典はインドにおいて改変・整備されたのであり、テキスト上の操作が反映されたものと見ることができる（越智淳仁 [1972]）^⑥。つまり『大日経』の原型としては、漢訳本の原典の方が形態として古いものであり、チベット訳はそれより新しい形態に属する。鈴木宗忠[1959:82-83]はチベット訳本の原典の方が、経典の形式としては漢訳本の原典よりも整備されていると考え、資料としては漢訳本よりも、むしろチベット訳本を基礎にするのが適当であるとしている。ちなみに鈴木宗忠氏は、これらの蔵漢両訳経典を比較して「資料としての大日経」を定め、30章からなる『大日経』を構想している。

『大日経』研究は、発見されている梵文原典がごく断片的なものであるために、比較する資料がチベット訳しかなく、文献学的考察をするうえで、

チベット訳は決定的に重要である。戦前の代表的な研究として、梶尾祥雲 [1916]、田島隆純 [1927]、河口慧海 [1934] らの研究があるが、これらは主として經典の研究であり、注釈による比較研究にまで及ばなかった。戦後ようやくにして、『大日経』のチベットにおける注釈書の訳出や、藏漢両注釈書の比較研究が着手されるようになったのである。

『大日経疏』・『大日経義釈』の資料

漢訳『大日経』の注釈には、『大日経疏』と『大日経義釈』の二種が存在する。

『大日経疏』の資料

大正 39, No.1796. 『大毘盧遮那成佛經疏』 20 卷

(『卍新纂大日本統藏經』 23, 国書刊行会, 1980, No.437 にも所収)

著者：善無畏口述・沙門一行阿闍梨記

国訳 (1)：神林隆浄 [1939] 『国訳一切經』 和漢撰述部・經疏部 14, 大東出版社

那須政隆 [1965] 『国訳一切經』 和漢撰述部・經疏部 15, 大東出版社

(2)：勝又俊教 [1983] 『大日経疏』 上・下、真言宗豊山派宗務庁
——またこの索引がある。『大日経疏索引』(付解題) 真言宗豊山派宗務庁, 1983.

訓点：勝又俊教 [1975] 『新訂科文大日経住心品疏』 真言宗豊山派宗学研修所

伝統的な『大日経』解釈に基づく現代語による「住心品」の解説書を挙げておく。

①神林隆浄 [1935] 『大藏經講座 6 大日経・理趣經講義』 仏教聖典講義刊行会、東方書院

②那須政隆 [1973] 『大日経口疏講義』 真言宗智山派宗務庁⁽⁷⁾

『大日経』の資料と研究史概観

『大日経義釈』の資料

大日本統蔵経第一輯第36套第3冊『毘盧遮那成仏神変加持経義釈』14卷
(『卍新纂大日本統蔵経』23, 国書刊行会, 1980, No.438にも所収)

著者：善無畏口述・沙門一行阿闍梨記

校訂：智儼・温古

訓点：清田寂雲 [1993] 『統天台宗全書』密教1、天台宗典編纂所、春秋社

チベット訳『大日経注釈』の資料

チベット訳『大日経注釈』には、『大日経略釈』と『大日経広釈』の二種類が存在し、そのうち『大日経広釈』には、漢訳同様、未再治本 *Bhāṣya* と再治本 *Vṛtti* が存在する。

『大日経略釈』の資料

Tib. : Toh2662/Ota3486.

rNam par snang mdzad mngon par byang chub pa'i rgyud kyi
bsdus pa'i don.

Skt. : Vairocanābhisambodhi-tantra-piṇḍārtha. (毘盧遮那成仏タントラ撰義《『大日経略釈』と略記》)

著者：Buddhaguhya.

訳者：Śīlendrabodhi・dPal-brtsegs.

和訳：(1) 長谷川密雲 [1932, 1933] 「西藏文和訳 大日経要義」『密教研究』47:49——第2巻末までで未完。

(2) 北村太道 [1980] 『チベット文和訳 大日経略釈』文政堂

英訳：Stephen Hodge [2003]

『大日経広釈』(*Bhāṣya*)の資料

Tib. : Toh2663/Ota3487.

rNnam par snang mdzad mngon par byang chub pa'i rgyud

chen po'i 'grel bshad bzhugs.

Skt. : Vairocanābhisambodhi-mahātantra-bhāṣya. (毘盧遮那成仏大タントラ註疏《『大日經広釈』(Bhāṣya)と略記》)

著者 : Buddhaguhya

『大日經広釈』(Vṛtti)の資料

Tib. : Toh2663/Ota3490.

rNam par snang mdzad mngon par rdzogs pa byang chub pa'i rgyudkyi tsig 'grel zhes bya ba.

Skt. : Vairocanābhisambodhi-tantrasya padavṛtti-nāma. (『毘盧遮那成仏タントラ語註』《『大日經広釈』(Vṛtti)と略記》)

和訳 : (1) 吉田生而 [1959]「チベット文大日經広釈の和訳」『豊山学報』5——「住心品」の部分訳。

(2) 吉田宏哲 [1982-1984]「『大日經広釈』部分訳(1)-(3)」『大正大学研究紀要』67-68——「住心品」の部分訳。

(3) 梅尾祥雲 [1984]『梅尾祥雲全集別巻第2 大日經の研究』臨川書店——「住心品」「説本尊三昧品」「秘密曼荼羅品」「入秘密曼荼羅法品」「秘密八印品」「入秘密曼荼羅位品」「具縁品」の部分訳。

(4) 酒井真典 [1987]『酒井真典著作集第2巻 大日經広釈全訳』法蔵館——再治本の全訳。sDe-dge, 北京, sNar-thang 版, Bhāṣya も参照し、随時に注記を施す。

(5) 遠藤祐純 [2010, 2011]

英訳 : Stephen Hodge [2003]

『大日經』の成立とその史的区分の問題

『大日經』はインドで7世紀初頭には成立したと考えられている仏教經典である⁽⁸⁾。学界では通説のごとく大乘經典と密教經典とを判別するけれども、經典を發生史的に見た場合、その区別はいちじるしく困難である。

実際におおのこの学者によって、その区分が異なる。『大日経』それ自体の主張としては、自ら「大乘」を謳っている。その詳名である『大毘盧遮那成仏神変加持方広経のインドラ王という法門』という経題からも、「方広経」(vaipulyasūtra)という大乘経典の一般的名称を冠にしている点からして、大乘経典と位置づけられるし、経典中でも『大日経』に基づく修行法は「大乘真言道」であると位置づけられている。

大乘経典は、その成立区分によって、初期・中期・後期に分けられる。このうち後期大乘経典として位置づけられるのが『大日経』『金剛頂経』などのいわゆる「密教経典」である。『大日経』『金剛頂経』を密教経典として見た場合、密教経典の成立史も、初期・中期・後期の三区分があり、『大日経』はこのうち中期密教経典として位置づけられる。こうした時代区分を設定することによって、複雑な経典の成立展開の歴史を、一つのパースペクティブのもとに眺めることができるという利点があるが、「密教とは何か」という根本的な問いを曖昧にしたまま、近代の学者の視点の相違によって、『大日経』は、後期大乘経典とも中期密教経典とも位置づけられることになり、その整合性をいかにして取るかは、多くの課題が残されているといえる。

時代区分それ自体が、学界の進展状況によって変動するものであるから、一つの経典に関して、さまざまな分類がなされるのも致し方ないのかもしれない。とりわけ『大日経』は、視点をどこにおくかによって、その見え方が異なる経典であるといえる。たとえば『大日経』は、インド・チベットでは「真言タントラ」として他の大乘経典とは別立てされ、『不空罽索経』などととも9つの密教経典=真言タントラの一つとして認知されている⁽⁹⁾。また『大日経』の注釈者である Buddhaghūya (8世紀)は、『大日経』を「クリヤー (kriyā. 所作) タントラ」と「ヨーガ (yoga. 瑜伽) タントラ」との二つの側面を兼ね備えた「ウバヤ (ubhaya. 両) タントラ」として位置づけている⁽¹⁰⁾。またインドの学僧 Atiśa (982-1054)は、タントラ分類法によって『大日経』を「チャルヤー (caryā. 行) タントラ」と位置づけ⁽¹¹⁾、この見方がその後のチベットにおける経典分類

法を決定づけたといつてよい。中国・日本においては、「瑜伽密教」⁽¹²⁾「瑜伽本経」⁽¹³⁾などといわれ、日本の真言密教では「胎蔵宗経」⁽¹⁴⁾と位置づけられる。

一般に密教の歴史的区分は『大日経』・『金剛頂経』⁽¹⁵⁾が成立した時点分水嶺として、初期と後期に分けられる。この設定は、わが国においては『大日経』・『金剛頂経』を「两部大経」として重要視するために、その成立をもって史的基点とすることによる。前史としては大乘から密教への発展・形成の歴史を念頭におき、また後史としてはインドにおけるその後の密教の発展を視野に据えた区分であり、合理的な区分法として一般に受け入れられている⁽¹⁶⁾。

また中国・日本における伝統的な密教經典の区分法としては、「雜密經典」と「純密經典」とに分類することが行なわれてきた。雜密經典とはダラニ (dhāraṇī)・印契 (mudrā)・觀想 (bhāvanā) などを説くが、未整備で組織化されていない初期密教經典 (ダラニ經典ともよばれる) である。初期密教經典は、呉の支謙 (222-253) から隋代にいたるまでの約400年の間、絶えることなくインド・西域から中国へ移入され、訳出された⁽¹⁷⁾。さらに7世紀 (隋から初唐にわたる期間) に入り、密教經典の訳經数が飛躍的に増加している。これはインドにおいて密教の流行がさらに増大した史的状況を反映したものであろう。

しかし歴史的に確実な資料においては、インドにおいて密教が流行した正確な時期を推定するのは困難であり、歴史的な文献資料としては、中国側の資料に頼るほかない。中国僧の中で最も早く入竺たとされるのは法賢である。法賢は399年に中国を出てインドを旅行し、418年に中国へ帰った。法賢は『仏国記』⁽¹⁸⁾を著したが、この書は密教について何も触れていない。6世紀初めに入竺した宋雲恵生は、『北魏僧恵生使西域記』⁽¹⁹⁾を著したが、これにもインドに密教があることを伝える記述がない。またしばしばいわれるように、7世紀初頭 (630-644) にかけて入竺した玄奘の旅行記『大唐西域記』⁽²⁰⁾がインドにおける密教流行の史実を伝えていない。もっとも玄奘は主として唯識関係の仏教を修学することが目的

であったから、中観派仏教、さらには密教にまで目が届かなかった（或いは故意に無視した）と推測されている⁽²¹⁾。

だが玄奘が唐に帰った、およそ26年後の671年に入竺した義浄が、その著『大唐西域求法高僧伝』⁽²²⁾において、密教についてかなり詳しく説いている。義浄自身は密教に興味を持ったが、インド留学の目的が戒律の研究にあったので、密教に深入りすることは避けたという。そしてこの義浄と同時代にインドに入り、ともに学んだ無行が真言密教の隆盛を伝えている⁽²³⁾。この無行が中国へ送った『大日経』の梵文原典は、およそ50年後に善無畏・一行が漢訳する際に使用された。無行が北インドで客死したのが674年であるから、『大日経』の成立年代の下限はこの年に設定することが、学者の間ではほぼ一致している。問題は上限であるけれども、この点は、玄奘がインドを去ったすぐ後のこと（644年以降）であろうと考えられている。とすると、『大日経』の成立年代は、この7世紀半の前後約30年間に限定されることになり、成立史的にはかなり年代を特定することができたといえようか⁽²⁴⁾。

『大日経』というテキストが確実に成立した年代は、以上のように7世紀半頃と見て間違いはないが、その成立年代の上限については、必ずしも周辺の史的資料が揃っていないので、確定することは困難であるとするほかはなく、その絶対年代を問うことは不可能である。密教経典の構成要素は、かなり早い時期の経典においても見出されるし、密教経典を発生史的に見た場合、いわゆる雑密経典から純密経典への推移がいかにして行なわれたかを策定する作業の方がより重要である。渡辺照宏氏は、密教の成立史の研究方法としては、一つひとつの要素を分離してしまうのではなく、すべてを類似なもの、共通の地盤のうえに立つものと考えた発生史的な視点から比較・検討されるべきであり、雑密・純密の問題に関しても「発生史的に見る以上は雑密から純密への推移こそは問題の解決の鍵である」⁽²⁵⁾と述べている。

『大日経』を発生史的に見た場合、漢訳では以下の経典が『大日経』の先駆的な経典と考えられている⁽²⁶⁾。

- ①『陀羅尼集經』12卷、大正No. 901.
- ②『一字仏頂輪王經』5卷、大正No. 951.
- ③『蘇悉地羯羅經』3卷、大正No. 893. (Toh807/Ota431)
- ④『蘇婆呼童子請問經』3卷、大正No. 895. (Toh805/Ota428)
- ⑤『藐晒耶經』3卷、大正No. 897. (Toh806/Ota429)

またこれらの漢訳經典のほか、チベット訳資料に依拠して『大日經』の成立史的研究を行なって、先駆的な業績をあげたのは酒井真典氏である。氏は、次の經典を『大日經』の先駆經典として想定している⁽²⁷⁾。

- ⑥『金剛手灌頂タントラ』Toh496/Ota130.
- ⑦『金剛摧破ガラニ』Toh750/Ota406.
- ⑧『上禪定品』Toh808/Ota430.
- ⑨『底哩三昧耶タントラ』Toh502/Ota134.

すなわち上記の多くはチベットにおける經典分類上⁽²⁸⁾のクリヤータントラとチャルヤータントラに所属する經典群である。このタントラ類には多く『大日經』系の密教が含まれている。とりわけ『金剛手灌頂タントラ』には『大日經』とのパラレルが散見される。

『大日經』の成立史を考える場合、『大日經』・『金剛頂經』という中期密教經典の成立をもって、密教の一時期を画するという視座が妥当性をもって受け入れられている。日本においては、『大日經』を所依の經典とし、諸大乘經典の長におく真言密教の伝統があり、また奈良朝以前より漢訳仏典が盛んに移入され、雑密經典が次第に整備・展開されていく、密教經典の形成史が念頭にあるため、密教を大乘仏教の發達形態、或いは大乘の最終形態として捉える見方が一般である。

しばしば日本の学者達は『大日經』を所依の經典として重要視するあまり、その前史と後史をおろそかにしがちであった。しかし前史については、大塚伸夫 [2009] によって、初期密教經典をさらに初期・中期・後期の三つに区分する方法が提唱されて、膨大な初期密教經典の形成史が明らかにされつつある。最初期密教である「密教系ガラニ經典」と「密教系護呪經典」という二潮流のもとに形成發展していった密教が、フリ

ダヤ系・護呪系・観音系・仏頂系・禁戒系・灌頂系の6つの系統へと展開していき、『大日経』へとつながっていく形成過程が明らかにされている。また後史についていえば、半世紀前までは後期インド密教を「密教のヒンドゥー教化」として一言に片づけるか、単に「左道密教」と貶称して、仏教のタントリズムという問題を深く考えることがなかったといっただけでよい。しかしインド密教の発達形成史において、後期密教の研究を欠くことはできない。雑密経典が、密教経典の形成・発達を探るうえで、欠くことのできない重要な価値を持っているのと同様に、後期インド密教の持っている価値も、インド密教のその後の発展を探り、密教史の十全な整備を期するためにも決定的に重要である。後期インド密教はヒンドゥー教のタントリズムと深く関わっており、海外の学者の中にも、インド密教をタントリズムの一環として捉え、仏教とは別個の存在とする見解も存在する⁽²⁹⁾。だがインド密教を全仏教史の大きな流れの中で捉え、かつタントリズムをインド宗教思想の大きな潮流の中に位置づけたとき、それを別個の存在としたり、仏教の一奇形児として退けたりすることはできないのであって、むしろインド密教は仏教の寛容性と多元的世界観を表す理想的な宗教形態とする見方も存在する。従来、密教の誕生は、「大乘から密教へ」という単線的なベクトルで考えられていたが、大乘仏教において密教が形成されていく過程を「大乘仏教の儀軌化」(松長有慶)、あるいは「インド儀礼の大乘仏教化」(生井智紹)、さらには「汎インド的な文化現象」(森雅秀)と捉えるなど、密教形成の問題は斯界における中心的なトピックである。こうした視点から、密教を汎アジアに拡大した宗教運動としてとらえた Sanderson [2009] の研究があり、タントラ研究は新しい場面を迎えている。

真言密教は「瑜伽密教」ともいわれるように、タントリズム、ひいてはタントリックな瑜伽と深く関係している。従来タントラ的な瑜伽は、左道密教の典型として貶められてきたが、そこには深い哲学思想と色彩豊かな芸術精神を背景にしたシンボル表現が存在する。海外の学者は、仏教のシャクティズムを、その秘密的な教義と儀式並びに形而上学的な

基盤と合わせて研究している⁽³⁰⁾。海外における精緻な仏教タントリズムの研究によって、次第に密教はその正当な地位を回復し、インド宗教史において大きな比重を占めるにいたっている。

このような海外の密教研究の動向に呼応して、わが国でも密教をインド宗教思想の大きな流れの中で捉え直す試みがなされてきた。『大日経』の成立問題も、このような新しい密教史の研究に基づいて検討しなおす必要があるといえる。

宗学的伝統と近現代における研究動向

日本における『大日経』研究は、平安朝以来、明治期にいたるまで、継続して行なわれてきており、その注釈書の一つひとつを挙げれば枚挙にいとまがない。わが国においては、『大日経』を講ずる場合、経典そのものを講ずる例は古来よりなく、『大日経疏』を講ずることが一般の慣例となっている。神林隆浄氏による『国訳一切経』密教部1の「大毘盧遮那成仏神変加持経解題」において、氏は以下のとおり『大日経』を中心とする著作を8項に分類し目録を作成している。

- ① 『大日経』・『大日経疏』の訓点（13流あり、妙浄流・信日流が流布している）
- ② 『大日経』・『大日経疏』の綱要書（31本）
- ③ 『大日経疏』「住心品」の釈（24本）
- ④ 『大日経疏』『大日経義釈』の註解（15本）
- ⑤ 『大日経供養次第法疏』（不思議疏）の註解（7本）
- ⑥ 『大日経疏』の諸問題・宗義判釈（43本）
- ⑦ 胎藏法・『大日経疏』伝授用書（55本）
- ⑧ 『大日経』・『大日経疏』の史料（11本）

さらに詳しくは、『大疏秘記集』⁽³¹⁾に、宗祖大師から明治初期までの先学百数十名の著作278部が挙げられている。また小田慈舟氏は、平安期・鎌倉期・室町期・江戸期を通じて、歴史的に重要な『大日経疏』の注釈書についてのみ、ごく短い論をまとめている⁽³²⁾。小田氏も神林氏もこの『大

『大日経』の資料と研究史概観

『疏秘記集』を利用している。このうち、日本における『大日経』研究は、主として『大日経疏』の「住心品」部分の注釈書が多くを占める。「具縁品」以下の注釈は少ない。また「論義」として伝承されてきた『大日経』の研究は、教理問答 (catechism) 形式による神学的な伝統 (本尊論や精細な教理の定義づけなど) に基づいている。これら先学の『大日経』『大日経疏』に関する精緻な研究は、今なお、思想の水源としての可能性を深く蔵しているものである。

チベットにおける『大日経』の相承系譜

チベットにおける『大日経』研究は、日本の真言宗のように所依の経典という位置づけをもたないため、中国・日本に匹敵するほどの研究蓄積はない。むしろチベットにおいては、8世紀以後、陸続として生まれる後期密教タントラを含めた、多くのタントラをどのように序列化し、整理分類するかということに意が注がれた。『大日経』は数多の経典のごく一部分を形成しているにすぎない。

チベットには、日本における密教の法の血脈 (龍猛→龍智→金剛智→善無畏→一行→不空→恵果→空海→真雅→源仁…) とよく似た形式の、経典の相承系譜がある。とりわけ後期密教経典には、それぞれの経典に固有なマンダラや灌頂儀礼の伝承があって、それが師から弟子へと伝授されて、現在にまでいたっているとされる。いわゆる「聴聞録」(gsan yig) とよばれる、経典の伝授記録に、そうした血脈が列記される。チベットにおける『大日経』の伝承は、たとえば Tsong-kha-pa においては「仏→文殊→Jetāri→Aśokaśrī…」といったインドの伝承から、チベットの学僧たちを経て Tsong-kha-pa におよぶまで、およそ 19 代の系譜がある⁽³³⁾。『大日経広釈』を校訂した gZhon-nu-dpal も、Tsong-kha-pa の学系から『大日経』の聴聞を行なっている⁽³⁴⁾。こうした相承を根拠として、チベット仏教はインド直伝の法を継承しているという自負がある。

インドでは 9 世紀以後に『大日経』系の密教が急速に衰退していく。『金剛頂経』系の密教が華々しい展開を遂げたのにくらべて、『大日経』はそ

の後の展開においてみるべきものが少ない。しかしそうした趨勢のなかでも、經典の伝承は行なわれてきたことが確かめられる。經典の聴聞（＝講伝）が連綿と伝えられてきたということは重要な事柄であって、その系譜の内容を今後さらにくわしく検証する必要があるであろう。

近代以後の『大日経』研究

明治以後の『大日経』研究は、チベット語文献の整備により、平安期から明治期までの漢訳文献を中心とした研究から全面的に移行し、チベット語文献との比較対照研究が主流になっている。この潮流はヨーロッパ文献学の影響によるものであり、想定されうるあらゆる文献を駆使した精緻な研究は、近代仏教学の全体に通底している傾向であり、揺らぐことのない基盤である。『大日経』という文献もまたその潮流からまぬがれることはありえない。だが『大日経』は日本においては真言宗という宗団の所依の經典であり、とくにいわゆるタントラの部分（「具縁品」以下）は古来より「奥疏」といわれて、阿闍梨の指導を受けない一般の人間には講伝することが許されなかった。であるから、いわゆる「宗学」は、純粋な仏教研究の障害であることが指摘され、明治以後、仏教研究に携わる学者、とくに密教学研究者は例外なく、両者の葛藤と相克の中にあつた。

『大日経』を近代仏教学の基盤に初めて据えたのは、異色の仏教者、河口慧海氏であろう⁽³⁵⁾。近代仏教学の創生期に育った河口氏は、サンスクリット原典、チベット大藏經の収集を發願し、仏典を求めて明治30年（1897）、日本を發って、単身ヒマラヤを越えて、チベットに入国した。前後2回にわたるインド・ネパール・チベットの大陸旅行を終えたのが、大正4年（1915）のことである。河口慧海〔1918〕は藏漢『大日経』比較研究を学界に提起した嚆矢であり、大正11年（1922）には『大日経』の和訳に着手し、11年余の歳月を経て訳經を完成した（河口慧海〔1934〕）。この間、後進の指導にあたり、惜しみなく自らの収集した仏典を貸し与えて、近代仏教学の発展に貢献した。服部融泰〔1931〕は、河口氏が将

来したチベット大蔵経に依拠したものである⁽³⁶⁾。この書は「服部本」と称され、「この業績は学会に測り知れない貢献をもたらし、今日もその価値を損なうものではない」⁽³⁷⁾とされる。

これ以後、『大日経』は矢継ぎ早に和訳されていくことになる。最も早いのが校訂本や河口氏の和訳に先立って「住心品」の和訳を発表した榊尾祥雲 [1916]⁽³⁸⁾であり、次いで田島隆純 [1927]、岩鶴密雲 [1935]、酒井真典氏などがチベット訳『大日経』の研究に意を傾けることとなった。しかしこれらの研究は主として経典の研究であり、その注釈に基づく比較研究にまで及ぶものではなかった。

戦後になってようやく壁瀬灌雄氏がBuddhaguhyaの注釈に基づく研究を発表し⁽³⁹⁾、『大日経広釈』に基づく研究はその成果を挙げた。さらにBuddhaguhyaの注釈資料は、それを和訳するという作業が最も大きな課題であったが、それらの訳出も、『大日経略釈』は北村太道 [1980] が全訳を出版し、『大日経広釈』は酒井真典 [1987]、また近年では遠藤祐純 [2010, 2011] が全訳を公刊している。わが国を含む、各国からチベット大蔵経が出版されるのに伴い、チベット語文献学は飛躍的にその成果を積んでいった。文献資料が拡充・整備されるにしたがって、思想研究も進展を見せて、酒井真典氏⁽⁴⁰⁾、長沢実導氏⁽⁴¹⁾などによって、『大日経』研究の業績は着々とその成果を蓄積していったのである⁽⁴²⁾。

近年の研究動向

近年の『大日経』研究は、ほとんどの研究がチベット訳文献を用い、蔵漢『大日経』とその注釈の比較対照研究が圧倒的に優勢であり、なかでも、ある特定の概念・用語に注目するなど、その研究領野は一層広範、かつ細分化が顕著になっていく傾向にある。しかしそのような専門的研究の成果が蓄積されていく一方、まだ『大日経』は注釈書を含めたテキスト校訂という基礎的な文献学的作業が終っているわけではなく、いわゆる『金剛頂経』における「堀内本」のような存在がなかったことは否めない。校訂という作業は非常に困難な仕事であるが、欧米の学者は長

い文献学の伝統からそれを比較的雑作なくやっけてのける。しかし『大日経』は梵文原典が一部分しか存在しないために、欧米の学者の注目を惹くような研究対象にはなりにくいという側面があり、海外の学者に対する紹介を企図した『大日経』の英訳という試みが、Chikyo Yamamoto [1990]、Rolf.W.Giebel [2005] らによってなされている。また Buddhaguhya の注釈も Stephen Hodge [2003] によって英訳された。

欧米の研究者たちによる知見には、かなり特異で見るべきものが多い。たとえば Alex Waymann [1992] は、『大日経』の作者を仏教に転向したバラモンであったにちがいないと指摘したり、『大日経』系の密教揺籃の地として、アジャンター・エローラ・カンヘーリーなどを挙げたりする点など、従来の日本の研究者にはない視点を提供している。欧米の研究者は、そもそも日本の宗学的伝統から自由であるから、『大日経』をインド文化・思想の土壌において理解しようとする傾向がある。しかし、その論証基盤となると、Waymann にしたがえば、「護摩品」の知識がバラモン教由来であることや、インド石窟寺院に三部（仏・蓮華・金剛）形式の仏像が見られるといった点からの推論にすぎない。こうした推論は、日本の研究者も同様であり、たとえば近代日本の密教学を大成した梶尾祥雲は、『大日経』の成立に関して、経典に海の記述があることや、服装の記述がいたって簡素であることなどから、西部インドで『大日経』は成立したと見ている。松長有慶 [1980:174] が指摘するように論証基盤としては、いささか弱いように思われるが、近代の研究者たちが、誰もが『大日経』を宗学の伝統的な理解から離れて、経典の記述・主張に基づいて、インド文化のコンテキストのもとに据えようとする努力をうかがうことができる。

これら『大日経』研究の発展と、チベット語文献の整備に伴い、完全な校訂本の登場が待たれた。先に見たように『大日経』というテキストは時代的に微妙な遷移があり、テキスト成立年代ごとに、わずかながらも位相が存在している。蔵漢の諸注釈にまで踏み込んだ校訂作業のうえに、さらに現在までに発見された『大日経』のサンスクリット断篇をも

参照し、補定する必要がある。そのなか近年になってようやく、越智淳仁 [1992, 1997, 1998]、宮坂宥勝 [1995]、渡邊重朗 [2008] が『大日経』校訂本を發表している。

現在の『大日経』の思想的研究は「三密」や「加持」や「菩提心」等の用語に関する個別研究が多く、その多様さはさらに増していき、専門化・細分化が進む傾向にある。思想・教理の研究は、日本においては平安期からの長い伝統があり、とくに日本の研究者にとっては不可欠なものであるが、蔵漢『大日経』の諸注釈に見られる思想を全体的に比較検討する作業は、なお今後の課題であり、一つひとつの概念・用語に関する研究の積み重ねによって、少しずつ研究成果を蓄積していくほかないだろう。

そのような傾向のなかで『大日経』研究におけるある一つの底流というものを探るとすれば、『大日経』の成立をインド仏教史における独立した一場面として捉えるのではなく、インド哲学思想のより大きな潮流の中で捉え返そうという試みが底流に存在しているように思われる。宮坂宥勝氏の研究などがそれである⁽⁴³⁾。宮坂宥勝氏の研究に一貫する視線は次のようなものである。「インド仏教がタントリズム勃興のなかで、どのように変容し、あるいは発展したかという問題設定のもとに、グローバルな視点から仏教タントリズム＝密教を捉え直す。」⁽⁴⁴⁾—このような発言は既に中村元氏も行なっている。中村氏は真言密教に関する自らの論文の中で、自身の試みを、「わたくしが、ここで行なおうとするのは、〈失われたもの〉としてのインド密教を、想像力に訴えて再構成することである。〈インド文明〉という全体の setting の中でインド密教を位置づけようとするのである」⁽⁴⁵⁾と述べている。

またさらに『大日経』研究における最近の顕著な動向として図像に関する論及がある。曼荼羅に関する研究は、戦前に梅尾祥雲氏によって先駆的な研究がなされた⁽⁴⁶⁾。戦後では石田尚豊氏が胎藏曼荼羅の研究において優れた成果をあげた⁽⁴⁷⁾。現在では梵蔵漢の資料を参照し、経典・儀軌の内容を精査したうえでの新しい研究が積み重ねられている（田中公明氏⁽⁴⁸⁾、森雅秀氏⁽⁴⁹⁾ら）。こうした美術史、マンダラの研究史については、

別に専著が必要であり、詳論することはできない。図像に反映されている教理内容を読み解く作業によって、従来の研究成果ばかりか、原典資料そのものの不備をも是正しつつあり、図像学研究は今後さらに発展していくであろう。

また最近では佐和隆研氏、頼富本宏氏が、インド現地での研究調査によって、新しい知見を報告している⁽⁵⁰⁾。インド密教の遺跡はそれほど多く残されているわけではないが、遺跡調査に基づく密教図像の研究は全く未開拓の分野であったので、今後のさらなる調査が期待される。インドネシアや南アジア、東アジアにおける密教遺跡調査によって、『大日経』並びにインド密教がどれだけ当時のアジア世界に影響を及ぼし、民衆に受け入れられたかが解明されつつあるといえる。従来の研究は、文献資料に基づく研究がほぼ大部分を占めたが、フィールド調査によって、インドにおける考古学的な遺品や真言ダラニの碑文が発見されたことで、『大日経』の研究は新たな展開を迎え、インドにおける『大日経』の流行の実態をよりイメージしやすくなった。しかしインド密教の遺品はおおよそその制作年代が推定されているだけで、科学的な調査は今後の課題として残されたままであり、遺跡もまだ完全に発掘が進んでいるわけではない。発見された胎藏系遺品も『大日経』にどれだけ基づいているかは、まだ多くの検討の余地があり、決定打を欠くといわざるを得ない。考古学的な資料と文献資料との双方の研究を蓄積していくことによって、より正確なインド密教の全体像を描くことができるであろう。

参考資料

- Alex Waymann, R.Tajima [1992] : *THE ENLIGHTENMENT OF VAIROCANA*, Buddhist Tradition Series, Vol.18, Motilal Banarsidass Publishers, Delhi.
- Alexis Sanderson [2009] *The Śaiva Age — The Rise and Dominance of Śaivism during the Early Medieval Period* —, Genesis and Development of Tantrism (Institute of Oriental Culture Special Series 23), Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.
- Stephen Hodge [2003] *THE MAHĀ-VAIROCANA-ABHISAMBODHITANTRA*

『大日経』の資料と研究史概観

WITH BUDDHAGUHYA'S COMMENTARY, London.

- 大塚伸夫 [2009] 『インド初期密教成立過程の研究』(博士論文)
越智淳仁 [1972] 「大日経の章の同異について」『印仏研』20-2
越智淳仁 [1992] 「新校訂チベット文『大日経』」『高野山大学論叢』27
河口慧海 [1918] 「漢藏両訳大毘盧遮那経の比較」『密教研究』1-1
酒井真典 [1962] 『大日経の成立に関する研究』国書刊行会
桜井宗信 [1989] 『梵語仏典の研究Ⅳ 密教経典篇』「第2章行・瑜伽類」および「附篇 I」平楽寺書店
鈴木宗忠 [1959] 『基本大乘秘密仏教』明治書院
種村隆元 [2010] 「密教の出現と展開」『新アジア仏教史 02 インドⅡ 仏教の形成と展開』所収
松長有慶 [1980] 『密教経典成立史論』法蔵館
松長有慶 [1989] 『梵語仏典の研究Ⅳ 密教経典篇』「序論密教経典総説」
宮坂宥勝 [1988] 「『大日経』にみえるインド哲学思想」『仏教思想史論集 I』(『成田山仏教研究所紀要』11) 成田山新勝寺
宮坂宥勝 [1993] 「仏典にみえるインド諸神—『大日経』偶見—」『知の邂逅—仏教と科学(塚本啓祥教授還暦記念論文集)』佼成出版社
宮坂宥勝 [1998] 「密教とヒンドゥー教との交渉—『大日経』の一面—」『仏教教理思想の研究(佐藤隆賢博士古稀記念論文集)』山喜房佛書林
山本匠一郎 [2004] 「ブツダグヒヤのタントリズム—8世紀・チベットの仏教統制の事情—」『智山学報』53
渡辺照宏 [1956] 「インド思想史から見た真言密教」『智山学館』6

註

- (1) 種村隆元氏の御教示による。ここに記して感謝申し上げます。

Caryāmelāpakapradīpa, Chapter 4, *Āryadeva's Lamp that Integrates the Practices (Caryāmelāpakapradīpa)*, Edited and translated with an introduction by Christian K. Wedemeyer, New York, 2007.

Skt. p.395: śrī-vairocanābhisambodhi-tantre 'py āha // svacittasya yathābhūta-parijñānam bodhir iti //

(fn:yathābhūta-parijñānam] AC;Pn yathābhūtaṃ parijñānam.)

A:Ms. the Asiatic Society of Bengal. B:Ms. the National Archives, Kathmandu, Nepal. C:Ms. Rāhul Sāṅkṛtyāyan. Pn:edition princeps of Janardan Pandey.

Tib. p.556: dpal rnam par snang mdzad mngon par byang chub pa'i rgyud las kyang / byang chub ni rang gi sems yang dag pa ji lta ba bzhin du yongs su

shes pa'o zhes gsungs pa dang / (Toh1803/Ota2668, D75a/P85a)

- (2) 『大日経』第七巻と『大毘盧遮那仏説要略念誦経』は古来、同本異訳と考えられてきたが、神林隆浄氏、那須政隆氏によって否定され、さらに小野塚氏は本書が漢訳『大日経』供養法から作成されたのではないかと推察している(小野塚幾澄「大日経第七巻について」『印仏研』7-2, 1959) —木村秀明 [1996:2] 解題参照。
- (3) この他にも『大日経』関係の儀軌が大正 18, No. 854-864 までに存在する。
- (4) Dpal bzang rabs dga', Śrībhadranandana) は『デンカルマ目録』では Skal bzang rabs dga') になっている。
- (5) 壁瀬灌雄の研究によって注釈研究の道が開かれたといえよう。註 39 参照。
- (6) 越智淳仁 [1972] は各版のチベット大蔵経を参照し、漢訳『大日経』成立以後、少なくとも三度以上の章の変遷があつて、現流のチベット訳『大日経』が形成されたと推定している。
- (7) 『大日経疏』および『大日経義釈』には異本として 8 種 3 類が存在する。その 3 類とは以下のものである(那須政隆『大日経口疏講義』真言宗智山派宗務庁、1973, pp.8-9.)。
- 8 種 ①西大寺得清大徳本 14 巻 ②高雄山海和上本 20 巻 ③慈覚大師本 10 巻
④智証本 10 巻 ⑤山階寺本 10 巻 ⑥『大毘盧遮那加持経義記』14 巻
⑦『大毘盧遮那経義釈』14 巻 ⑧『大毘盧遮那経義釈』14 巻
- 以上を整理すると 3 類になる
- 3 類 ① 20 巻『大日経疏』弘法大師請来本
② 14 巻『大日経義釈』慈覚大師請来本(温古の序あり)
③ 10 巻『大日経義釈』智証大師請来本(序なし、14 巻の再治本)
- (8) 『大日経』の成立地の問題については頼富本宏氏のまとめた論文がある。
・「オリッサの歴史—宗教史を中心として—」『密教美術の原像』法蔵館、1982, pp.75-90。
・「大日経の成立地について」『仏教思想論集』成田山新勝寺、1984, pp.412-429。
—氏によれば、成立地には以下の 5 説がある。一般には中インド説が有力である。
- ①北インド説(従来の漢訳文献による通説。崔牧の序、智儼・温古の序による)
②南インド説(松本文三郎説。『金剛頂経』の成立地が南インドであることによる)
③西インド説(梶尾祥雲説。西インドにおける密教流行の史実等から論ずる)
④中インド説(大村西崖説。無行・善無畏のナーランダール寺研鑽の史実等に基づく)
⑤東インド説(頼富本宏説。東インド・オリッサ州の遺跡調査から胎蔵系遺品が発掘されたことから、成立地、乃至流行地と結論づける)
- (9) 『デンカルマ目録』 Toh4364/Ota5831, D301a/P361b.
- (10) 『大日経広釈』 *Bhāṣya*, D65a/P77a. 『大日経略釈』 D3a/P4a. 山本匠一郎 [2004:85]

『大日経』の資料と研究史概観

- (11) Atiśa, *Bodhimārgapradīpa-ṣaṅkīkā* (菩提道燈積), Toh3948/Ota5344, D287a-b/P332b. またはマハーヨーガタントラ (mahāyogatantra) にも配当している。
- (12) 『仏祖統記』大正 54, 295b.
- (13) 『都部陀羅尼目』大正 18, 898c.
- (14) 『真言宗所學經律論目錄』(三學錄) 定弘全一, p.50.
- (15) 『金剛頂経』; 『初会金剛頂経』『真実撰経』 *Sarvatathāgatattvasaṃgṛaḥaṃ nāma Mahāyānasūtram*.
梵文校訂本: 堀内寛仁『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究梵本校訂篇』密教文化研究所、上 (1983)・下 (1974), Toh479/Ota112.
漢訳: 大正 18, No. 865. (不空訳, 3 卷) / 大正 18, No. 882. (施護訳, 30 卷)
- (16) この分類の仕方は主として松長有慶氏の所論によって整備されたといえる。
- (17) 初期密教経典の訳経者の一例を挙げれば、呉の支謙 (訳出年代 220-230)、東晋の曇無蘭・難提・帛尸梨蜜多羅・鳩摩羅什・仏陀跋陀羅があり、西晋の竺法護 (訳出年代 385-400)、北凉の法衆 (訳出年代 397-439)、劉宋 (420-478) の求那跋陀羅・功德直・玄暢・彊良耶舍、北齐 (479-499) の万天懿、梁 (502-556) の僧伽婆羅、元魏 (534-550) の仏駄扇多・曇曜・菩提留支、北周 (557-577) の闍那耶舍・耶舍崛多、隋 (581-617) の那連提耶舍・闍那崛多などがある。
- (18) 『高僧法賢伝』1 卷、大正 51, No. 2085.
- (19) 『北魏僧惠生使西域記』1 卷、大正 51, No. 2086.
- (20) 『大唐西域記』12 卷、大正 51, No. 2087.
- (21) 渡辺照宏 [1956:1-4]
- (22) 『大唐西域求法高僧伝』2 卷、大正 51, No. 2066.
- (23) 「近ごろ真言教法あり、国を挙げて崇仰す」。インドにおける密教隆盛を伝えた無行の書は、慈覚大師円仁が日本へ将来した。円仁『入唐新求聖教目録』(大正 55, No. 2167) の中の「南荊州沙門無行在天竺国致於唐国書」1 卷がそれである。また安然の『真言宗教示義』第 3 (大正 75, 431a) にこれを引用する。『栴尾祥雲全集 第 1 卷 秘密仏教史』、臨川書店、1982 (初版 1933) p.17 による。
- (24) 栴尾祥雲『秘密仏教史』pp.32-36. この見方は現在も一般に承認されている。またその他の説としては以下の 500 年頃、6 世紀半、7 世紀前半の説がある。
 - ① 500 年頃北インドで成立したとする説 (清水谷恭順「大日金剛頂両部大経の制作地方並に其の作者考」『仏教学の諸問題』岩波書店、1935, p.713.)
 - ② 『ヴェアユプラーナ』「アグニヴァンシャ」が 5 世紀に成立したことから類推して、6 世紀半に成立したとする説 (Alex Waymann [1992:10])
 - ③ 7 世紀前半に中インドか、或いはその東寄りの地方で成立したとする説 (松長有慶『大乘仏典』第 8 卷「月報 8」、中央公論社、1988, p.2.) — また松長氏は渡

辺照宏氏の「玄奘の記録に密教流行の史実がないからといって、その時代に密教が存在しなかったとは断定できない」という説を提示したうえで、密教興起の年代をさらに遡源し得るとし、また『大日経』の仏・蓮華・金剛の三部形式の尊像が、アジャンターやエローラの6・7世紀の洞窟に存在することからも、『大日経』の成立年代を7世紀半より若干溯ることもあるとする（『現代密教講座』第二巻、大東出版社、1981, p.70-71.）。

- (25) 渡辺照宏 [1956:5]
- (26) 松長有慶 [1989:36]
- (27) 酒井真典 [1962:221]
- (28) インド・チベットにおける密教経典の分類法は多く五分法または四分法が立てられている。五分法は、クリヤータントラ (kriyātantra)、チャルヤータントラ (caryātantra)、ヨーガタントラ (yogatantra)、ヨーゴッタラヨーガタントラ (yogottaratāntra. ヨーガタントラ中の上位のタントラ。別名 mahāyogatantra)、ヨーガニルッタラタントラ (yoganiruttaratāntra. ヨーガタントラ中最高のタントラ。別名 yoginītantra) というタントラの階梯であり、四分法はクリヤー、チャルヤー、ヨーガ、ヨーギニータタントラ (yoginītantra) という階梯である。この内容区分はそのまま経典成立の歴史的な発展過程とおおよそ対応する（種村隆元 [2010] 参照）。
- (29) A.Bharati: The Tantric Tradition, London, 1965.
- (30) 山口益『フランス仏教学の五十年』平楽寺書店, 1954, pp.144-146. また19世紀から20世紀にいたるまでの海外における密教研究の動向については、松長有慶 [1980:44-52] に詳しい。
- (31) 『大疏秘記集』巻下・付録「大疏異本点本末積目録」、長谷宝秀、梶尾祥雲共編、祖風宣揚会、六大新報社, 1913, pp.227-. 小田氏も神林氏もこの『大疏秘記集』を利用している。
- (32) 小田慈舟「大日経疏の注釈書について」『続真言宗全書会報8』続真言宗全書刊行会、第一印刷出版, pp.1-2.
- (33) 『*Tsong-kha-pa*の聴聞録』: *Tsong-kha-pa's gsan yig : rJe rin po che blo bzang grags pa'i dpal gyi gsan yig*. pp.253-316 in Volume 1 of Work W22272. Toh5267, pp.289-290.
Sangs-rgyas → 'Jam-dpal → Dze-ta-ri → A-shra-ka-shrī → Rol-pa'i-rdo-rje → Don-yod-rdo-rje → Ba-ri Rin-chen-grags → mChims brTson-seng → mChims Blo-ldan → mChims Don-ne → mChims Chos-seng → mChims Blo-brtan → mChims Nam-mkha'-grags → Slob-dpon Darma-rgyal-mtshan → Lo-mchog → dPal-ldan-pa → Bu-ston → Khyung-chen-pa → Tsong-kha-pa

『大日経』の資料と研究史概観

- (34) 拙論「gZhon-nu-dpalの伝記について」『密教学研究』43, 2010.
- (35) 河口慧海についての参考文献として、奥山直司『諍伝 河口慧海』中公文庫, 2009は周辺資料を渉猟し優れている。
- (36) 服部融泰 [1931] は、ナルタン版を底本とする、デルゲ・ギャンツェ古写本・北京版の4版に基づき校合を行なった。このうち前三版が河口将来蔵経である。北京版は河口の紹介を得て大谷大学所蔵版を借用したという。
- (37) 越智淳仁 [1992:25]
- (38) 『梶尾祥雲全集巻Ⅱ 大日経の研究』に第1章から16章までが所収。本書にはその他にも多くの有益な研究論文がある。
- (39) 壁瀬灌雄氏の『大日経』関係論文には以下のものがある。
 - ・「BuddhaguhyaのMahāvairocanatantraの構造」『印仏研』4-2, 1956.
 - ・「大日経菩提道次第の二見解」『印仏研』5-1, 1957.
 - ・「チベット文大日経釈の再治本と未再治本との比較」『印仏研』8-1, 1960.
 - ・「大日経広釈と略釈との比較」『印仏研』9-2, 1961.
- (40) 酒井氏の研究は『酒井真典著作集第1巻 大日経研究』法蔵館, 1983. に所収。
- (41) 長沢実導『瑜伽行思想と密教の研究』大東出版社, 1978. に所収。
- (42) 明治以後から昭和60年(1985)にいたるまでの『大日経』研究については『密教関係文献目録』(種智院大学密教学会、同朋舎出版, 1986)に「大日経および注疏類」として211点の資料を挙げている。
- (43) 宮坂宥勝 [1988, 1993, 1998] は『大日経』成立当時のインド哲学思想、および『大日経』に登場するインド民間信仰の諸神を整理、解明した。
- (44) 『現代密教』7、智山伝法院, 1995, p.74.
- (45) 「インド文明のうちに真言密教を位置づける—概観—」『密教学研究』16, 1984, p.2. —国内・海外の真言密教・インド密教に関する研究成果をまとめて概説している。
- (46) 『梶尾祥雲全集第4巻 曼荼羅の研究』臨川書店, 1982 (初版1936).
- (47) 石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術, 1975.
- (48) 田中公明『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社, 2010.
- (49) 森雅秀『マンダラの密教儀礼』春秋社, 1997. 『インド密教の仏たち』春秋社, 2001.
- (50) 頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館, 1990. 東インド・オリッサ地方の遺跡調査によって胎蔵系遺品が発掘されたのは周知のとおりである。

〈キーワード〉

『大日経』 資料論 研究史